様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３３３０５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１４２６９

研究課題名（和文）日本の大学院生の心理的特徴に関する基礎的研究－当事者と世間の視点から

研究課題名（英文）A Basic Study on the Psychological Characteristics of Japanese Graduate Students: From the Perspectives of Themselves and Others

研究代表者
大上　真礼（Ooue, Maaya）

金沢学院大学・文学部・講師

研究者番号：９０８０７１３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，大学院生・若手研究者の心理的特徴や関連要因について調査し，整理した。大学院修士課程経験者へのインタビューでは，博士課程進学の際に「研究を生業とするか」の判断がなされている可能性を示した。心理学分野の主要学術誌のデータ整理では，ここ15年で原著論文が減少傾向にあることを見出した。オンライン調査では大学院経験の有無により精神的健康度が異なるかを探り，大学院経験者はうつの度合いは高かったものの人生に対する満足も高かったことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本の大学院や学術研究をめぐる政策においては個人的経験に基づいた言説や議論が散見される上，文系を除く「科学」分野や，資格系分野に限定された調査・考察が少なくない。本研究では多分野の大学院生や大学院経験者を対象としたデータを収集し考察できた。本課題における各研究で整理された基礎的知見には，博士課程に進学しなかった者は研究自体から完全に身を引きたいと考えていたわけではないことや，大学院生の精神的健康度や卒業後の幸福度を単一の尺度で測りきれない可能性などが含まれる。これらは，日本の学術研究を担う者たちのサポートの必要性の議論や，学術政策に関する社会的合意形成の際に役立ちうるエビデンスだといえる。

研究成果の概要（英文）：This study investigated and organized the psychological characteristics and related factors of graduate students and young researchers. Interviews with those who had experienced a master's degree program indicated the possibility that they consider whether to "make a living doing research" when deciding to enter a doctoral program. Data from major journals in the field of psychology revealed that the number of original research papers has been decreasing over the past 15 years. An online survey explored whether mental health differs depending on whether one with postgraduate experience or not, and found that those with postgraduate experience were more depressed but also more satisfied with their lives.

研究分野：心理学

キーワード：大学院生　若手研究者　精神的健康　学術論文　査読　進学動機　修士課程　博士課程

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

大学院生の心理的状況は，博士号取得を目指す大学院生は他の群と比べ精神的不調を抱えやすいとの報告（Levecque et al., 2017）や，Nature の 2018 年 3 月 26 日号での大学院生のメンタルヘルスの指摘など，世界的にも注目が集まっている。大学院生は大学学部生や同年代の大卒社会人と発達段階が異なる部分がある（鶴田, 2002）とも考察されているが，大学院生についての日本の研究は，経済的要因に主眼をおくもの（三好, 2014 など）や看護学・教職といった専門性が強い分野の院生が対象のもの（鈴木他, 2014 など）程度である。

なお，これまでには，心理学分野における大学院生の学位取得までの時間的見通しに関わる要因の調査（大上・寺田, 2018）なども行われてきているが，単一分野に偏らずに大学院生を対象とし，大学院生であるが故の心理的適応・不適応について調査した実証研究の成果は十分に蓄積されたとはいえない状態である。

また日本では，世界での大学院生数や論文数の増加に逆行して大学院（博士課程）進学者はここ 10 年ほど減少し続けており，学術研究の質・量の維持向上が危ぶまれている。大学院進学者はどのような動機づけで進学しており，また，博士課程に進学しなかった者はどのような理由で不進学の判断をしたのかについても整理する必要がある。

加えて，大学院・学術研究およびその従事者の社会的認知度は高いとはいえず，民間企業において大学院博士課程修了者の採用が敬遠されている（文部科学省, 2017）ことも指摘されて久しい。研究学園都市であるつくば市の市民への調査では回答者の半数以上が「科学のまちであることの恩恵を『感じない』」とした（朝日新聞, 2017 年 12 月 20 日）との報告もある。このようなことから，日本において，社会における研究の意義，そしてその従事者養成の意義が十分に認識されておらず，研究者や研究機関も意義をアピールできていない現状が垣間見える。まず大学院生や研究者について調査・検討を行い，重要性の認識や認知度を高める方法を探るための基礎的資料を得ることが必要である。

２．研究の目的

上記 1 のような背景から，本研究では以下の 3 点について明らかにすることを目的として調査・分析を行った。

（１）インタビュー調査：非資格系分野の大学院修士課程（博士前期課程）経験者が，博士課程（博士後期課程）に進学した要因，あるいは進学しなかった要因について探る。

（２）論文日数データ集計：大学院生（特に博士課程）の学位取得や研究者の業績の時間的見通しに関わる情報を整理するため，査読付き学術論文について，その論文投稿（学会側の受稿）からアクセプト（受理）までの日数を集計する。

（３）オンライン調査：大学院在学者・経験者の心理的特徴や困難を把握し，同年齢の大学院未経験者集団との差異を探る。

３．研究の方法

（１）インタビュー調査

【対象者】日本の大学院で修士課程（入学から修了まで）を 2018 年までに経験した 13 名（男性 8 名・女性 5 名，平均年齢 28.8 歳）であった。協力者は縁故法により依頼された方および，過去に筆者が編集長を務めた大学院博士課程に関する小雑誌の SNS アカウントでの協力依頼への応募者であった。なお，13 名のうち博士課程以降への進学者は 9 名であり，9 名全員が修士課程修了後，間をおかずに博士課程に進学していた。なお，分析手法として援用した TEA（複線経路等至性アプローチ：安田，2019）において経路の多様性を検討するための望ましい協力者数は 9 名とされているが，本研究では，博士課程進学・非進学者の語りを広く募って考察したいとのねらいから，進学者 9 名・非進学 4 名の合計 13 名を対象とした。

【調査手続き】大学院経験者に半構造化インタビューを行った。調査時期は 2020 年 2 月から 3 月で，インタビューは協力者の所属先近くの静かな場所で行われ，平均時間は 82 分であった。倫理的配慮として，協力者には調査概要と協力・中断・拒否の自由，プライバシーの保護等について説明し，同意文書に記入いただいた。また本調査は金沢学院大学人を対象とする研究計画等倫理審査の承認を得て行った。

【調査内容】協力者が専門とされている分野に興味を持ったきっかけや大学院進学を決めるまでの経緯，大学院生として活動・研究をする上での喜びや困難について質問した。

【分析方法】TEA（複線経路等至性アプローチ：安田，2019）を援用し，プロセスや要因の図解化を試みた。大まかな手順は①データの精読，②プロセス，特徴の書き出し，③一人ずつのプロセスを描きだした後，全体の図を作成，というものであった。

（２）論文日数データ集計

2008 年度から 2022 年度の間に発行された心理学分野の主要な学術誌 8 誌の査読付き論文（原著またはそれに準じる区分）について，雑誌ごとに，論文数，各論文の受稿日，原稿の受理日を調べた。データは印刷された論文誌本体または J-Stage にて取得した。

（３）オンライン調査

【対象者】22 歳から 75 歳の男女 792 名と対象に調査を行い，回答の不備があった者を除いた 697 名が分析対象となった。このうち大学院（修士課程，博士課程のいずれか，または両方）に在学した経験がある者は 365 名，大学院在学経験がない者は 332 名であった。

【調査手続き】調査は 2024 年 2 月から 3 月にインターネット調査会社を通じて行った。倫理的配慮の一環として，調査概要や協力の自由についての説明を読み，同意した者のみが回答を行うという形式をとった。本調査は金沢学院大学人を対象とする研究計画等倫理審査の承認を得た上で実施した。

【調査内容】デモグラフィック項目（年齢，性別，職業，婚姻状況，子どもの有無，居住地，世帯年収，学歴，暮らし向き）に加え，自我同一性（谷，2001），キャリア自律（堀内・岡田，2009），精神的な健康度（島他，1985；清水・今栄，1981 など），人生に関する満足（角野，1994），知覚されたソーシャルサポート（岩佐他，2007）などへの回答を求めた。大学院経験者には，大学院在学時の教員および同僚（他の大学院生）からのソーシャルサポート（小牧（1994）および坂本（2006）を一部改変），在学時の研究テーマ設定の自由度についても質問した。

【分析方法】協力者全員に回答を求めた尺度について，大学院経験の有無によりその高低が異なるかを Welch の検定により分析した。

４．研究成果

（１）インタビュー調査

大学院修士課程を経験した 13 名（うち博士課程進学者 9 名）の語りのデータを分析した結果，協力者たちは大学在学中に学業に関してのよい評価を受けて研究する楽しさに気づいたり，働くことは向かないと考えたりすることで修士課程への進学を決めていた。大学進学前からの研究者へのあこがれや，周囲に研究者や大学関係者がいることも大学院修士課程への進学を促進していた。

修士課程への進学後の行動や考えは，研究に関する観点と経済面の安定という観点の 2 つの面から整理できた。研究については教員の指導方針が影響し，研究を楽しく思うものの，自分には向かないと限界が感じられていた場合が多くみられた。金策については周囲の人から情報を得て助成金に応募したり，親の方針や家庭の経済状況から学費のめどが立つかが左右されたりしていた。また，優秀な先輩（博士課程以降）が就職に苦労する姿を見聞きした経験は，ほぼ全員の協力者から語られた。自分の能力に関する確信が持てないという心情も抱かれていた。

博士課程進学に関して重要な通過点は，進学するかどうかの判断というよりは，「研究を生業とするかどうかの決断」と考えられた。なお，博士課程に進学しないことは研究から完全に身を引くということを意味しておらず，進学しなかった協力者からは“学術・研究に携わっていたい”という内容の発言があり，経済的なめどがつくなら進学したい・研究に関わることには協力や参加をしたいといった意思が明確に示されていた。このように，博士課程への非進学者においても，研究の楽しさや研究に対する思いが失われているわけではなかった。ここから，博士課程への進学者を増やしたり，進学後の大学院生が健やかに学生生活を送ったりするために有効なこととして，経済的支援の充実，教員の指導とのマッチング，修了後も研究に戻ってくることができる風土や制度などが考えられた。

（２）論文日数データ集計

心理学分野の主要な学術誌の原著論文数は，ここ 15 年の間で概ね減少傾向にあるといえる結果となった。調査対象期間の中でも 2014・2017 年度に大きく論文数が減っているが，これはそれぞれの時期において心理臨床学研究（2013 から 2014 年度），心理学研究と教育心理学研究（2016 から 2017 年度）に減少していることが反映されたと考えられる。コロナ禍による研究活動の促進・抑制があったのかという観点で 2020 年度以前と 2021 年度以降の論文数についてみると，全体としては 2021 年度に増加に転じたものの 2022 年度は 2020 年度より少なくなった。コロナ禍による研究活動の制限や遅延，医学系やコメディカルの研究者の医療関連業務への従事によるエフォートの減少が影響した可能性も考えられる。しかし，コロナ禍以前の論文数が維持された，または増加した雑誌も存在しており，これは出版競争やオンライン・在宅ワークの活用によると推察される。

論文受稿から受理までの平均日数については，雑誌ごとに異なる傾向がみられた。医学系の雑誌（精神医学）は全期間を通じて半年前後の短い期間であったが，心理臨床学研究，教育心理学については直近 5 年間の平均日数は 1 年を超える結果となった。またパーソナリティ研究はこの 15 年間で日数は短縮化されている傾向にあり，投稿や査読のシステムの変更もこれに影響していると考えられる。

日本国内の学術誌への論文に関しては，翻訳サービスの発展・拡充や国際誌への投稿への時間的・経済的コストが比較的低くなったことを背景に，その投稿数・掲載数が減少している可能性

があるとも考察できた。

（３）オンライン調査

精神的健康に関わる尺度についての分析の結果，うつ症状，ADHD のスクリーニングの質問項目の得点および特性による不都合の度合い，人生に対する満足は，いずれも，大学院経験者のほうが未経験者よりも 1%水準で有意に高い値となった。自閉症傾向および特性不安については有意差はみられなかった。大学院博士課程学生は不安やうつの症状を抱えやすいとの海外の報告（Levecque et al., 2017）があるが，うつ症状についてはこれと矛盾しない結果となったといえる。また ADHD 傾向については，知的好奇心や新規性追求と ADHD 特性の関連もうかがえる。

大学院経験者においてうつ尺度の得点は高いものの，人生に対する満足の得点も有意に高かったことは，彼らが主体的な進路選択，キャリア選択をした・できたためだと考えることもできる。

以上の研究により，大学院生や若手研究者の進学動機や心理的特徴に関して実証的なデータをもとに整理することができた。今後は，オンライン調査のデータについて，年代や性別，分野による大学院経験の影響の差異についてより詳細に分析していく予定である。また，大学院修了や業績を生み出すまでの時間的見通しを考える材料として，論文の投稿から査読までの日数の集計と考察も引き続き行っていく。大学院生・若手研究者が精神的な健康度を保ちながら在学・在職できるための制度・環境についても情報をまとめ，サポートの手立てについてさらに考察を深めていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 大上真礼
２．発表標題 大学院生が博士課程に進学する理由―非資格系分野の大学院経験者への面接による探索―
３．学会等名 第61回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Maaya OOUE
２．発表標題 What dissuades master’s students from continuing with Ph.D. studies?
３．学会等名 the 2nd International Conference on the Mental Health & Wellbeing of Postgraduate Researchers（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Maaya OOUE
２．発表標題 What dissuades Japanese master’s students from continuing with Ph.D. studies?
３．学会等名 the 2nd International Conference on the Mental Health & Wellbeing of Postgraduate Researchers（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Maaya Ooue
２．発表標題 How many days do researchers have to wait for their papers to be published?
３．学会等名 The 16th European Congress of Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大上真礼・寺田悠希
２．発表標題 もういくつ寝るとアクセプト？(2)：心理学分野の過去10年の学術論文の本数と掲載までの日数
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関